

MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN
tel: +81-(0)3-6450-2334 fax: +81-(0)3-6450-2335
www.misashin.com info@misashin.com

MISA SHIN GALLERY | Frieze Seoul 2025

Booth : A22

September 3 – 6, 2025

MISA SHIN GALLERY は、Frieze Seoul 2025 において、ハン・ヨンス、東松照明、チェ・ジェウン、川俣正、フランシス真悟、伊庭靖子の 6 名のアーティストによるグループ展示を行います。本展では、写真、絵画、コラージュ、レリーフといった多様なメディアを通して、都市、時間、知覚をめぐる視覚表現を横断的に紹介します。



Han Youngsoo, *Myeongdong, Seoul, Korea 1956*, 1956 (printed in 2024) Toned gelatin silver print, image size 90 x 60 cm

戦後の写真表現に焦点を当てたセクションでは、韓国のハン・ヨンスと日本の東松照明の作品を紹介します。ハン・ヨンス（1933–1999）は、韓国戦争後のソウルを克明に記録した、韓国を代表する戦後写真家のひとりです。毛皮のコートを纏い颯爽と歩く女性や、雪の中で遊ぶ子どもたちなど、復興期の都市の何気ない日常を切り取った彼の作品は、戦後社会のレジリエンス（回復力）を深い人間味をもって描き出します。緻密な構図と完璧なタイミングで構成されたこれらの写真は、1950～60年代の韓国社会の貴重な記録として、現在では国際的にも高い評価を得ています。

東松照明（1930–2012）は、米軍基地、長崎、沖縄といった戦後日本の社会的・政治的な現場に焦点を当て、その眼差しを貫いた日本写真界の巨匠です。学生運動の混乱や戦争・占領の傷跡を鋭く捉えると同時に、詩的な感性とドキュメンタリー的リアリズムが共存しており、写真という表現の可能性を押し広げた実験的なアプローチも特徴です。本展では、東松の代表作『Protest, Tokyo・Shinjuku』と『11 時 02 分、長崎』のビンテージ写真作品を展示します。



Shomei Tomatsu, *Protest, Tokyo Shinjuku*, 1969, (printed in 1985) Gelatin silver print, image size 30 x 41.3 cm

MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN
tel: +81-(0)3-6450-2334 fax: +81-(0)3-6450-2335
www.misashin.com info@misashin.com



Jae Eun Choi, *Paper Poem No.3*, 2012, Aged paper
78.5 x 86.5 cm

チェ・ジェウンは、1976年の来日を機に生け花と出会い、草月流三代目家元・勅使河原宏に師事した後、1980年代以降、生命や自然、時間を主題に作品を展開してきました。本展で紹介する《Paper Poem》シリーズは、彼女がベルリン滞在中に制作したコラージュ作品です。滞在先のアパートの廃棄場で古本が捨てられているのを目にしたチェは、それらを回収し、印刷のない見返し紙や遊び紙を切り取り、画面上に再構成しました。19世紀末から20世紀初頭に製造された紙は、時間や光の影響により縁が焼け、重なり合うことで繊細な色彩のグラデーションを生み出します。こ

れらの層はまるで都市の俯瞰図のようにも見え、ページの積層は地質の堆積や時間の蓄積を想起させます。Paper Poemにおける紙とは、単に古びた紙ではなく、紙の原料でもある“樹”の時間が人間の知恵と記憶の時間に変容し結実したものであることを示唆しています。また、2025年12月には、ソウル市美術館 SeMA にて個展を開催予定です。

川俣正は、1970年代後半から、公共空間におけるサイトスペシフィックな大規模インスタレーションで国際的に知られてきたアーティストです。地域社会や都市の歴史と協働しながら、一時的でありながら空間や人々の認識に変化をもたらすプロジェクトを多く手がけてきました。川俣の実践は、「ワーク・イン・プロGRESS (Work in Progress)」と呼ばれ、準備・設置・解体といったプロセス全体を作品として捉えるアプローチが特徴です。本展では、1980～



Tadashi Kawamata, *P.S.1 Installation Plan*, 1984, Wood and conte
90 x 60 x 7.5 cm

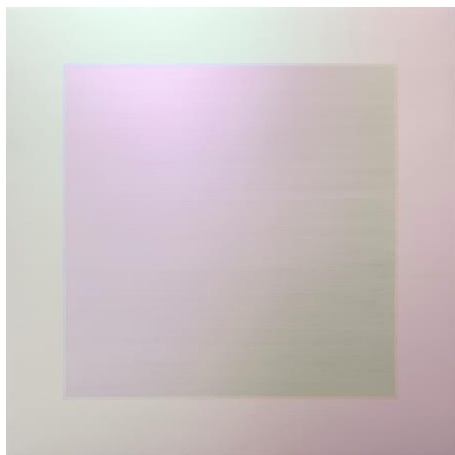
90年代の代表的なプロジェクトをもとに制作されたレリーフ作品を展示します。これらの作品は、プロジェクトの構想段階における思考や構造の試行錯誤を凝縮した縮図であり、川俣自身の手によって制作される重要なスタディでもあります。

MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN

tel: +81-(0)3-6450-2334 fax: +81-(0)3-6450-2335

www.misashin.com info@misashin.com



Shingo Francis, *Four Sides Equal (violet)*, 2025,
Oil on canvas, 76 x 76 cm

フランシス真悟は、光と色彩、空間知覚への探究を通して、絵画の新たな可能性を模索してきました。本展では、最新シリーズ《Interference》の作品を紹介します。このシリーズは、「干渉顔料」と呼ばれる特殊な反射素材を用いており、光の屈折や反射によって、観る角度によって色彩が微妙に変化します。鑑賞者の動きに応じて絵画の表面が揺らめき、静謐で瞑想的な空間を立ち上げる本シリーズは、デジタル画像では再現できない、実体験としての「見ること」への意識を呼び覚まし、視覚体験そのものを思索と変容の場として再提示します。

伊庭靖子は、絵画と写真、絵画と版画のあいだに独自の立ち位置を築きながら、一貫して「質感」という知覚の核心を探索してきた作家です。視覚と触覚の交差点としての質感に注目し、刺繍や陶器、点描など多様な技法を通じて、見るものの確かさと不確かさを問い続けています。絵画でありながら写真の距離感や版画的構造を内包するその作品は、見る者の脳内に像を結ぶように設計され、現実と虚像、存在と非在のあわいに質感を浮かび上がらせます。



Yasuko Iba, *Untitled 2021-15*, 2021, Oil on canvas
65 x 65 cm

ハン・ヨンス (Han Youngsoo)

1933年韓国・開城市生まれ、1999年没。戦後の韓国を代表する写真家。1950年代から1960年代にかけてのソウル市民の生活を写した作品群で知られる。主な個展に「Han Youngsoo: Photographs of Korea 1956–1963」(ハーバード大学アジアセンター、ケンブリッジ、2019年)、「Han Youngsoo: Photographs of Seoul 1956–1963」(International Center of Photography、ジャージーシティ、2017年)、「Seoul, Where I Grew Up」(ソウル歴史博物館、2017年)など。

東松照明 (Tomatsu Shomei)

1930年名古屋生まれ、2012年没。戦後日本を代表する写真家。被爆地長崎や高度経済成長期の都市風景、沖縄などを主題に、独自の視点で日本の戦後を記録し、近年の写真家に多大な影響を与えた。主な個展に「Shomei Tomatsu: Skin of the Nation」(サンフランシスコ近代美術館、2004年)、「東松照明: Tokyo 曼陀羅」(東京都写真美術館、2007年)、「写真家: 東松照明全仕事」名

MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN

tel: +81-(0)3-6450-2334 fax: +81-(0)3-6450-2335

www.misashin.com info@misashin.com

古屋市美術館（2011年）「Shomei Tomatsu: Island Life」（シカゴ美術館、2013年）など。テート・モダン、アルベルティーナ美術館などの国際的なグループ展にも多数参加。

チェ・ジェウン（Choi Jae-eun）

1953年ソウル生まれ。1976年の来日後、草月流の三代目家元・勅使河原宏に師事し、前衛いけばなに強く影響を受け本格的に取り組むようになる。自然と人間の関係、生命の循環をテーマにインスタレーションを展開する。主な個展に「アショカの森」（原美術館、東京、2010年）、「The Nature Rules 自然国家：Dreaming of Earth Project」（原美術館、東京、2019年）、「新たな生」（銀座メゾンエルメス、東京、2023年）。ヴェネチア・ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレなど国際展にも参加。

川俣正（Kawamata Tadashi）

1953年北海道生まれ。1982年のヴェネチア・ビエンナーレ参加以降、ドクメンタ、リヨン・ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレなど世界各地の国際展で活躍。都市空間や建築的構造物を用いた仮想的なインスタレーションを多数展開。現在はパリを拠点に活動し、建築、社会学、医療など多分野にまたがるプロジェクトを継続している。

フランシス真悟（Shingo Francis）

1969年カリフォルニア州サンタモニカ生まれ。ロサンゼルスと鎌倉を拠点に活動。絵画における空間の広がりや精神性を探求し続け、幾層にも重ねられたブルーの抽象画や、深い色彩のモノクローム作品の他、特殊な素材を使用し観る角度によってさまざまな光と色彩が立ち現れるペインティング「Interference」シリーズが代表作として知られている。DIC川村記念美術館（千葉、2012年）、セゾン現代美術館（長野、2018年）、マーティン美術館（テキサス、2019年）、銀座メゾンエルメスフォーラム（東京、2023年）、茅ヶ崎市美術館（神奈川、2024年）など国内外の多数の個展、グループ展に参加。

伊庭靖子（Iba Yasuko）

1967年京都市生まれ。嵯峨美術短期大学版画科専攻科修了。モンブランカン（1999年）とニューヨーク（2001-2002年）にて滞在制作。身近な物体の表面と作家の眼の間に存在する光や空気など目に見えない質感を描く絵画作品で知られる。主な個展に「まなざしのあわい」（東京都美術館、2019年）、「まばゆさの在処」（神奈川県立近代美術館鎌倉館、2009年）。作品は国立国際美術館、東京都現代美術館、The Cleveland Museum of Artなどに収蔵。

MISA SHIN GALLERY

東京都港区南麻布3-9-11パインコーストハイツ1F

地下鉄ご利用の場合：

東京メトロ日比谷線 広尾駅より南部坂を経由し徒歩約12分

東京メトロ南北線・三田線 白金高輪駅より薬園坂を経由し徒歩約15分

東京メトロ南北線・都営地下鉄大江戸線 麻布十番駅より仙台坂を経由し徒歩約16分

バスをご利用の場合：

都営バス[橋86番]系統「仙台坂上」下車徒歩約3分

ちいばす「仙台坂上」下車徒歩約3分

麻布西ルート（広尾駅～麻布十番駅前（一の橋）～六本木けやき坂～広尾駅）

MAP



Contact : info@misashin.com Tel: 03-6450-2334

MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN
tel: +81-(0)3-6450-2334 fax: +81-(0)3-6450-2335
www.misashin.com info@misashin.com